

問題一 次の①～⑤の意味を持つ熟語を後ろの語群から見つけ、符号で答えよ。

- ① 各人の言うことが一致すること。
- ② 敵味方が同席すること。
- ③ 心に留めず、聞き流すこと。
- ④ 今までに無く、これからも無いと思われること。
- ⑤ 多くの人が醜い行いをする事。

- 《語群》
- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| A 大同小異 | B 天変地異 | C 愛別離苦 | D 空前絶後 |
| E 百鬼夜行 | F 快刀乱麻 | G 呉越同舟 | H 疑心暗鬼 |
| I 前後不覚 | J 馬耳東風 | K 異口同音 | L 言語道断 |

問題二 次の空欄に当てはまる慣用句を後の語群から見つけ、符号で答えよ。

- ◆ はたから見ていても「A」。
- ◆ 「B」仲間と旅行する。
- ◆ やさしすぎる試験問題で「C」。
- ◆ チーム成績が低迷する中で、彼一人「D」。
- ◆ 彼は気で「E」男だ。

- 《語群》
- | | | | |
|---------|----------|---------|---------|
| 1 気が抜ける | 2 気が紛れる | 3 気に障る | 4 気がもめる |
| 5 気が差す | 6 気が置けない | 7 気を損ねる | 8 気を病む |
| 9 気を散らす | 10 気をはく | 11 気を張る | 12 気を回す |

問題三 次の①～⑤のことわざと反対の意味を持つものを後ろの語群の中から見つけ、符号で答えよ。

- ① 棚からぼた餅
- ② 瓜の蔓には茄子はならぬ
- ③ 背に腹はかえられぬ
- ④ 七度尋ねて人を疑え
- ⑤ 触らぬ神に祟りなし

- 《語群》
- | | | |
|-----------------|--------------|--------------|
| A 運は寝て待て | B 弘法は筆を選ばず | C まかぬ種は生えぬ |
| D 義を見てせざるは勇無きなり | E 腐っても鯛 | F 鶉のまねをする鳥 |
| G 鷹が鷹を生む | H 人を見たら泥棒と思え | I 仏の顔も三度 |
| J 濁しても盗泉の水は飲まず | K 腹も身の内 | L 雨だれ、石をうがつ。 |

問題四 次の文中の傍線部の品詞名を後ろの語群から見つけ、符号で答えよ。

- ① 口を酸っぱくして言った。でも一向に聞いてくれないのだ。
- ② それぐらいなことは小学生でも知っている。
- ③ いくら漕いでも、この急流は渡れまい。
- ④ いくら丈夫でも、それほど長くは使えない。
- ⑤ 彼は実業家でもあり、政治家でもある。

- 《語群》
- | | | |
|-----------|--------------|---------------|
| A 副助詞 | B 断定の助動詞+副助詞 | C 形容動詞の語尾+副助詞 |
| D 格助詞+副助詞 | E 接続助詞 | F 格助詞+接続助詞 |
| G 接続詞 | H 格助詞 | I 終助詞 |

問題五 次の各句から季語を書き抜け。

- ① 炎ゆる間がいのち女と唐辛子(三橋鷹女)
- ② 雀来て障子に動く花の影(夏目漱石)
- ③ 狼屋をうかがふ菊のあるじかな(宮沢賢治)
- ④ 青蛙おのれもペンキ塗りたてか(芥川龍之介)
- ⑤ 生創に蠅を集めて馬帰る(西東三鬼)

問題六 次の文章を読み、後の問に答えよ。

何もかもが思いがけなかった。——さつき、坂の下の一軒家のほとりで水菜を洗っていた一人の娘にタズねてみると、「九体寺やったら、あの坂を上りなはつて、二町ほどだす」と、その家で寺をタズねる人も少なくはないとみえて、いかにも「A」≪教えてくれたので、僕たちはそのかなり長い急な坂を息をはずませながら上りきつて、さあもう少しと思つて、僕たちの目の前に「B」≪立ち現れた一塊の部落と、その菜畑を何気なく見過ごしながら、こころもち先を急いでいた。あちこちに桃や桜の花が咲き、一面に菜の花が満開で、「C」≪向こうの藁屋根の下からは七面鳥の鳴き声さえ「D」≪聞こえていて、——まさかこんな田園風景の真つただ中に、その有名な古寺が——「E」≪僕たちがその名にふさわしい物古りた姿をシタいなながら山道を骨折つてやってきた当の寺があるとは思えなかつたのである。……

「なあんだ、ここが浄瑠璃寺らしいぞ」

僕は突然足を止めて、声をはずませながら言った。

「ほら、あそこに塔が見える」

「まあ本当に……」

妻も少し意外なような顔つきをしていた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね」

「うん」

僕はそう返事ともつかずに言ったまま、桃やら桜やらまた松の木の間などを、その突き当たりに見える小さな門のほうに向かつて行った。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、入りかけながら、「ああ、こんな所に馬酔木が咲いている」と僕はその門のカタワらに、ちようどその門とほとんど同じくらいの高さに伸びた一本の灌木が一面に細かな白い花をふさふさとタラしているのを認めると、自分の後から来る妻のほうを向いて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」

妻もその灌木のそばに寄つて来ながら、その細かな白い花をシサイに見ていたが、しまいには、なんということもなしに、その「F」≪タれた一塊を手のひらの上にノせたりしてみていた。

どこか犯し難い気品がある。それでいて、どうにでもしてそれを手折つて、ちよつと人に見せたいような、いじらしいフゼイをした花だ。いわば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずつと意味深かつた万葉びとたちに、ただきれいなだけならもつと外にもあるのに、それらのどの花にも増して、「G」≪愛せられていたのだ。——そんなことを、自分のそばでもつてさつきから「H」≪無心そうに妻のしだしている手まさぐりから、僕はふいと思ひ出していた。(堀辰雄「浄瑠璃寺の春」)

問一 傍線部①はどんなことをさしているか。次から三つ選び、符号で答えよ。

A 娘が水菜を洗っていたこと

C 七面鳥が鳴いたこと

E 菜の花が満開だったこと

G 妻も馬酔木の花が好きだったこと

問二 傍線部②④⑦⑧⑨⑩⑫のカタカナを漢字に改め、③⑤⑥⑪の漢字の読みを平仮名で記せ。

問三 ≪A≫≪H≫に入るべき語を次から選び符号で答えよ。(同じ符号を二度以上使つてはいけない。)

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-----|
| 1 | のんびりと | 2 | はるばると | 3 | いかにも | 4 | はきはきと | 5 | いたく |
| 6 | あまつさえ | 7 | ふつさりと | 8 | 急に | | | | |

問四 問題文中に次の文を入れたい。どこに入れるのがいいか。この文の直前に来る文の末尾五字(句点は含まない)を書き抜くことで示せ。

どこかでまた七面鳥が鳴いていた。

問題七 次のA～Hの漢字の前または後に、その反対の意味を持つ漢字を書き添えて熟語を作り、解答欄に記せ。

A 禍

B 還

C 実

D 受

E 点

F 理

G 任

H 親